

マルクス・エンゲルス選集

第十二卷

第一インタナショナルの宣言および規約

賃金・価格および利潤

インタナショナル各大会報告

フランスの内乱

社会民主同盟と国際労働者協会

第一インタナショナル

マルクス=エンゲルス選集

第 11 卷

マルクス・レーニン主義研究所編

第一インタナショナル

大月書店刊

マルクス＝エンゲルス選集

一九五四年五月十五日 発行

第十一卷

定価 四二〇円



編集者

マルクス・レーニン主義研究所

発行者

東京都文京区本郷一丁目一五番地
小林直衛

印刷者

東京都文京区柳町二六番地
三晃印刷株式会社

発行所

東京都文京区
本郷一丁目一五番地

大月書店

電話 小石川(92) 三〇九一
七六八七番
振替・東京 一六三八七番

三晃印刷・田中製本

凡 例

一 原註は（原註1）と、異文考証等についての編集者（訳者）による註は*印で標示し、その註釈文はそれぞれ註を必要とする個所の直後に、訳者による註は（1）（2）等と標示し、その註釈文は（註1）（註2）等として各論文、手紙の末尾に一括し、なお簡単な訳註は〔……〕として六号活字で本文中に挿入した。原文にある挿入句は（……）で挿入した。

二 原文で一般的に使用されている國語以外の原語は、原則としてその訳語の直後に（……）で挿入した。

三 引用文は「……」で、引用文中の再引用箇所は『……』でしめした。

四 著書、新聞、雜誌その他の出版物の書誌名または著作題名等は『……』でしめした。

五 原文中斜字体または隔字体（グロウズ）になっている箇所は、訳文ではゴチック活字または傍点をつけて標示した。

六 地名、人名はなるべく現地の発音にちかく表記することを原則としたが、従來の慣用をも考慮した。

七 手紙は主題に関係ある部分の抄訳にとどめ、文調も手紙であることに格別の考慮をはらってはいない。

八 本選集の訳文は、それぞれの訳者が担当し、校訂者によって原典と各國語訳とを逐語的に参照し、内容上と用語用上との校訂がなされ、文調にも一應の統一がはかられたうえ、なったものである。

目次 第十一卷

インタナショナルの創立と初期の活動

在ロンドン・ドイツ人労働者教育協会の檄	一
國際労働者協会創立宣言（マルクス）	四
國際労働者協会暫定規約（マルクス）	一六
訂正文（マルクス）	二七
賃金、價格および利潤（マルクス）	三二
労働者階級はポーランドについてなにをなすべきか（エンゲルス）	二〇九
『エコー・ド・ヴェルヴィエ』編集部への手紙（マルクス）	二四
警告（マルクス）	一四一
ポーランドにかんする演説（マルクス）	一四三

戦争にかんする決議（マルクス）……………一五三

第一回大会から第三回大会まで

臨時中央委員会代表にたいする個々の問題についての指示（マルクス）……………一五三

F・ピアにたいする一八六八年七月七日づけ総務委員会決議（マルクス）……………一六八

國際労働者協会ブリュッセル大会への総務委員会の報告（マルクス）……………一六九

バクーニン派との闘争——第四回大会

國際労働者協会と社会民主同盟（マルクス）……………一七七

國際労働者協会総務委員会から國際社会民主同盟中央ビューローへ（マルクス）……………一八一

ザクセンの炭坑における坑夫の職業組合についての報告（エンゲルス）……………一八三

ベルギーの虐殺（マルクス）……………一九三

合衆國全國労働者組合へのよびかけ（マルクス）……………二〇一

國際労働者協会第四回年次大会への総務委員会の報告（マルクス）	二〇六
総務委員会報告——相統權について（マルクス）	二〇五
ハマンとの会話（マルクス）	二〇八
アイルランド人の投獄にかんする	
グラッドストンの政策についての総務委員会決議（マルクス）	二一〇
土地の國有化（マルクス）	二二三
國際労働者協会総務委員会から（マルクス）	二二七
秘 密 通 知（マルクス）	二三九
國際労働者協会フランス支部員の迫害について（マルクス）	二五八
「フランス連盟ロンドン支部」にたいする國際労働者協会の決議（マルクス）	二六一
一八七〇年五月十七日づけ國際労働者協会総務委員会の	
マインツ大会召集の決議（マルクス）	二六三
國際労働者協会マインツ大会日程案（マルクス）	二六五

フランス・プロシヤ戦争——パリ・コンミュン

フランス・プロシヤ戦争についての

國際労働者協會總務委員會の第一宣言（マルクス）……………二六七

フランス・プロシヤ戦争についての

國際労働者協會總務委員會の第二宣言（マルクス）……………二七五

ドイツにおける言論と出版の自由（マルクス）……………二八九

マルクスからリープクネヒトへの手紙（一八七一年四月六日）……………二九三

マルクスからクーゲルマンへの手紙（一八七一年四月十二日）……………二九五

マルクスからクーゲルマンへの手紙（一八七一年四月十七日）……………二九七

マルクスからフレンケルとヴァルランへの手紙（一八七一年五月十三日）……………二九九

フランスの内乱（マルクス）……………三〇一

『フランスの内乱』第三版への序文（エンゲルス）……………三七一

インタナシヨナルにかんする手紙から

マルクスからビーズリーへの手紙（一八七一年六月十二日）	三九〇
國際労働者協会から『イースタン・ポスト』へ（マルクス）	三九四
ハーグ大会決議（マルクス）	三九八
アムステルダム の 公開集会における演説（マルクス）	三九八
スペイン、ポルトガルおよびイタリアの情勢にかんする	
國際労働者協会総務委員会の報告（エンゲルス）	四〇三
社会民主同盟と國際労働者協会（マルクス・エンゲルス）	四一〇
一 マルクスからエンゲルスへ（一八六四年十二月十日）	四三三
二 マルクスからエンゲルスへ（一八六五年二月十八日）	四三七
三 マルクスからエンゲルスへ（一八六五年二月二十五日）	四四〇
四 マルクスからエンゲルスへ（一八六五年十二月二十六日）	四四四
五 マルクスからエンゲルスへ（一八六六年四月二十三日）	四四六

六	マルクスからエンゲルスへ（一八六七年九月四日）	四四七
七	マルクスからエンゲルスへ（一八六八年一月十六日）	四四九
八	マルクスからエンゲルスへ（一八六八年九月十二日）	四五二
九	マルクスからエンゲルスへ（一八六八年九月十六日）	四五三
一〇	マルクスからシュワイツァーへ（一八六八年十月十三日のしたがき）	四五五
一一	マルクスからクーゲルマンへ（一八六八年十二月五日）	四五九
一二	エンゲルスからマルクスへ（一八六八年十二月十八日）	四六二
一三	エンゲルスからテルツァギへ（一八七二年一月十四日）	四六四
一四	エンゲルスからクノーへ（一八七二年一月二十四日）	四六七
一五	エンゲルスから國際労働者協会スペイン連合委員会へ（一八七一年二月十三日）	四七四
一六	マルクスからゾルゲへ（一八七一年十一月九日）	四七八
一七	マルクスからゾルゲへ（一八七一年十一月二十九日）	四八〇
一八	エンゲルスから『プロレタリア・イタリアノ』編集局へ （一八七一年十一月二十九日）	四八四
一九	マルクスからゾルゲへ（一八七二年六月二十一日）	四八六

二〇	エンゲルスからゾルゲへ（一八七二年十一月十六日）	四八八
二一	エンゲルスからゾルゲへ（一八七二年十二月七日）	四九四
二二	エンゲルスからゾルゲへ（一八七三年一月四日）	四九八
二三	エンゲルスからゾルゲへ（一八七三年五月三日）	五〇三
二四	マルクスからゾルゲへ（一八七三年九月二十七日）	五一〇
二五	マルクスからゾルゲへ（一八七四年四月四日）	五一三
二六	エンゲルスからベッカーへ（一八八二年二月十日）	五一六
二七	エンゲルスからテニースへ（一八九五年一月二十四日）	五一九
付	ジョージ・ハウエル氏著『國際労働者協会の歴史』（マルクス）	五二一

インタナショナルの創立と初期の活動

在ロンドン・ドイツ人労働者教育協会の概⁽¹⁾

在ロンドン・ドイツ人労働者教育協会は、ポーランド國民政府代表者の同意をえて、イギリス、ドイツ、スイスおよび合衆國に在住するドイツ人労働者のあいだで、ポーランドのための募金を組織する全權を、下名の委員会にゆだねた。たといこれによって、わずかな物質的援助しかポーランド人にあたえられないこともあろうが、しかもなおこのことは彼らにたいする大きな精神的援助となるであらう。

ポーランド問題は、ドイツ問題である。独立したポーランドがなければ、独立と統一のドイツはなく、ポーランドの第一次分割いらいはじまったロシアの支配からの、ドイツの解放はない。ドイツの貴族階級は、ずっとまえからツァーリをばドイツ國の秘密の最高庇護者とみとめている。ドイツのブルジョアジーは、ただひとりドイツをモスクワ人の洪水からまもってくれるこの英雄的國民がみなごろしになるのを、黙々として、消極的に、無

関心にみまもっている。ブルジョアジーの一部分は、この危険を理解しているが、「連邦の」個々のドイツ國家の利益のために全ドイツ的利益をすんで犠牲にしている。「それは」個々のドイツ國家のこんごにわたる存続は、ドイツの細分と、ロシアの指導権によって條件づけられている（からである）。ブルジョアジーの第二の部分は、東方における専制主義を、西方におけるボナパルティズム支配（クーデター支配）とまったくおなじようになくしてはならぬ秩序の支柱だとみなしている。最後に、第三の部分は、金もうけというたいせつな仕事にすっかり没頭しているので、歴史的大事件の関連を理解し発見する能力をまったくなくしている。ポーランドをまもれ、という声だかいデモンストレーションによって、ドイツの市民階級は、一八三一年と一八三二年に、すくなくとも連邦議会にたいし、決定的行動をとることをよぎなくさせた。こんにちでは、いわゆる國民同盟の自由主義的巨頭のことをば、ポーランドは自國のもつとも明白な敵だと考え、したがってまたロシアはもつとも有用な代理人だと考えている。この自由主義的親露主義がどんなにプロシヤの上層部とむすびついているかは、だれでも自分で結論できる。

現在の運命的な瞬間にあたって、ドイツ労働者階級の、ポーランドにたいする義務、外國にたいする義務は——ドイツ労働者階級自身の名譽がそれを要求する——、ポーランドにたいするドイツのうらぎりに声たかく抗議をのべることである。このうらぎりは、同時にドイツとヨーロッパにたいするうらぎりでもある。ポーランドの再興——このことは、ブルジョア自由主義がこの光榮あるスローガンを彼らの旗から抹殺したいまでは、ドイツ労働者階級の旗に炎の文字でしるすべきものである。イギリス労働者階級は、大衆的な、感激にみちた集会によつて、アメリカ奴隸主のために干渉戦争を組織しようという支配階級の再三の企図を粉碎し、それによつて不滅

の歴史的栄誉をかちえたのである。しかもそれは、アメリカの内戦がつづいたため、数百万のイギリス労働者の肩に、もっともくろしい苦難と窮乏の重荷がおわされているのをものともせずおこなわれたのである。

警察の制限のためにドイツの労働者階級がポーランドのためのこのような大衆的デモンストレーションを組織することがゆるされないとしても、それにしても彼らが無関心と沈黙をまもり、全世界がみているところであり、ぎりの共犯者としての烙印を自分におしてよいということには、けっしてならないのである。

下名の委員会は、ロンドン、西区、ソホ、ナッソー街、第二同盟事務所の持主ボルレター氏あてに寄付金をおくるようにねがう。寄付金の利用は同盟の監督のもとにおこない、募金の目的がゆるしさえすれば、資金の利用について正式報告がされるであらう。

ボルレター、ベルゲル、エッカリウス、クリューゲル、レスナー、リンブルグ、
リンデン、マッツラート、タチキ、トゥープス、ウォルフ。

(註1) 一八六三年十一月二日エッカリウスがウォルフにあてた手紙によると、この概はマルクスの提案にもとづくものである。ポーランド問題をめぐるマルクスの活動は、各國の労働者の國際的協力を促進し、外國人労働者をやとってストライキやぶりをやるうという資本家に対抗して、労働者の國際的團結を確立しようという運動と結合し、國際労働者協会創立の一つの土台となった。署名者はドイツ人労働者教育協会の幹部、そのうちエッカリウス、レスナー、リンブルグ、ウォルフはのち國際労働者協会の総務委員。

(註2) プロシヤの指導権のもとでドイツ統一をはかる団体。

國際労働者協會創立宣言（マルクス）

一八六四年九月二十八日、ロンドン、ロング・エーカー、

セント・マーティンズ・ホールでひらかれた公開集会に

おいて創立

労働者諸君！

労働者大衆の貧窮が、一八四三年から一八六四年にかけて減少していないこと、しかもこの期間は産業の発展と商業の増大では匹敵するものがないことは、重要な事実である。一八五〇年、イギリス中間階級の穩健な一機関紙、ふつう以上に消息につうじている一機関紙が、もしイギリスの輸出入が五〇パーセント上昇するとしたならば、イギリスの被救済民はゼロになるだろうと予言した。ところがだ！一八六四年四月七日、大藏大臣（「グラッドストーン」）は、イギリスの輸出入貿易総額が、一八六三年に「四四三、九五五、〇〇〇ポンド！すなわち比較的ちかい時期の一八四八年の取引の約三倍というおどろくべき額にたっした！」と声明して、議会の聴衆をよろこばせた。それにもかかわらず、彼は、「貧困の境界にある人々」のことを、「増加していない……賃金」

のことを、「十中の九までは生存鬭争にすぎないような……人生」のことを、「思ってみよ!」とさげんだ。彼は、アイルランドの人々が、北部では機械に、南部では牧羊場に、しだいにおきかえられ、その羊でさえ、この不幸な國では、人間ほど急速なわりあいではないが、減少しつつあることについてはかた然なかつた。彼はそのとき、上層の一万人の最高の代表者たち〔上院に代表された貴族〕が突然恐怖の発作にかられてもらしたばかりのことは、くりかえさなかつた。ガロットの⁽¹⁾恐怖がある程度たかまつたとき、上院は流刑と懲役について調査をおこない、それについて報告を公表するようにした。一八六三年の浩漣な青書の中に旧惡事がどつとあらわれた。そして、既決囚のうちでももっともわるいイングランドとスコットランドの懲役囚でさえ、イングランドとスコットランドの農業労働者よりずっと苦役のしかたがすくなく、はるかに氣らくにくらしていることが公けの事実と数字によりはつきり証明された。しかし、これがすべてではなかつた。アメリカの内戦の結果、ランカシアとチェシアの職工が街頭に投げだされたとき、おなじ上院は、この製造業地方に一医師をおくって、平均してやっと「飢餓病をさける」⁽²⁾にたる、もっとも安價な、もっともそまつなかたちで服用すべき炭素と水素の最低量を調査することを委任した。その医務委員スミス⁽³⁾医師は、二八、〇〇〇グリーン『資本論』第一卷第二十三章第五節では二八、六〇〇グリーンとなつてゐる。長谷部訳第四分冊一八七頁参照の炭素と一、三三〇グリーンの窒素が平均成人を……飢餓病の水準のちよつとうえにたもちうる一週間の給量だということを確認し、そして彼はさらに、この量が極度の窮乏にせまられて、實際にそこまでおしきげられていた綿業労働者のあわれな栄養とほとんど一致することを発見した。^(原註)ところで注意せよ! このおなじ学識ある医師は、そのご枢密院の医官により労働者階級の下層の栄養を調査することをふたたび委任された。彼の調査の結果は、議会の命によって本年

発行された『第六回公衆衛生報告』に体现されている。この医師はなにを発見したか？ 絹織物工、仕立女工、革手袋製造工、靴下製造工などは、平均して綿業労働者のわずかの失業手当すら、「やっと飢餓病をさけるにたる」炭素と窒素の量すら、うけとっていなかったということである。

（原註） 水とある種の無機質の原素をべつとすれば、炭素と窒素が人間の食品の原料であることは、読者に思ひおこさせる必要はあるまい。しかしながら人体をやしなうには、それらの單純な化学的成分は植物または動物質のかたちで供給されなければならぬ。たとえば馬鈴薯は主として炭素をふくむが、小麦のパンは炭素質と窒素質を適当なわりあいでふくんでいる。

報告を引用しよう、「そのうゑ調査された農業者家族についていえば、その五分の一以上が炭素性食物の推定必要量以下しかうけとらず、三分の一以上は窒素性食物の推定必要量以下しかうけとらず、三つの州（バークシア、ヨークシア、サマセットシア）では、窒素性食物のたりないのが、同地方の平均的な食量であるらしい。」

公式報告はつくくわえていう、「食物の欠乏にたえるのはきわめてつらいことだということ、食量のひじょうな不足は、それにさきだつ他の諸欠乏につづいてやっとあとからおこるものだということが想起されなければならぬ。……清潔にすることさえも、ぜいたくまたは困難と思われるだろう。たとい自尊心から清潔にしようとする努力がまだのこっているとしても、こうした努力はすべて飢えのくるしみをますことになるだろう。」「ことに問題の貧窮が懶惰のための自業自得な貧窮ではないことを想起するときは、これは思うだに心のいたむことである。いずれの場合にも、それは勤労人口の貧困である。わずかばかりの食物を買うための労働が、たいていの場合には過度に〔時間を〕延長されている。」報告は、奇妙な、むしろ思いもよらぬ事実を公表した。イン格蘭